

「正解」を拒絶した世耕弘一

わかやま魅力探訪

範は歴史にあり

<14>

紀の川市に近畿大学生
物理工學部の開設を決定
した、世耕政隆（1923～98年）の「回想録」（2004年、近大発行）が示唆に富む。日本大学医学部教授や自治大臣などの要職を歴任した政隆は近大第二代総長時代に、「競争がないと教育、学問、研究は前途がなく駄目になります」と強調した。大学経営者としての政隆の見識の一端がうかがえる。

日本文芸家協会に所属した詩人でもあった政隆は、「樹下去影」という玉稿を残した。「彼と私との生活は、突然に始まって、最後まで、ずいぶん唐突に別れたものだな、とじきりに思う」で始まる玉稿。「彼」すなわち父親である世耕弘一（1893～1965年）に

ついて述べた文章だ。新聞記者や大学教授を経て、紀南を選挙地盤として活躍した衆議院議員・世耕弘一は近大創設者（初代総長）である。弘一は最晩年、家族に対して「遺言も、思い残すことも、一切無い」と断言した。「ついに政治をやれとも（中略）大学のことも、一言も私たちにも誰にも黙して語らなかつた」と政隆は証言する。政隆は続けてこう語る。父・弘一は「誰でもかまわぬ。自ら出てくる奴だけがやれば良い」と大きく叫んでいるようだ。

こうした政隆の含蓄がある文章を吟味しながら、筆者は創設101年目を迎える教育・研究・社会貢献などの面で「発展」

近畿大学「発展」の最大要因

者の覚悟を実感した。世耕弘一は、近大「発展」のための未来へ向けた「正解」を拒絶したのだ。未来のことは去りゆくオレ（弘一）が何らかのゴールを提示するのでなく、これから生き抜くオマエ（政隆）たち自らが考えて拓かなければ無意味だ。そんな覚悟をもって「正解」を全く遺さなかつたのではないか。 究員）

そう言えば幕藩体制下、偉大な藩祖が具体的に 定

指示を遺言し、それが「呪い」の如く後続の藩主たちを束縛し、自由な政治経済的判断を阻害した事例がある。弘一の「正解」拒絶は、後続の人間の知的判断への敬意でもあり、今日の近大「発展」の最大要因なのかもしれない。

曾野洋（四天王寺大学教授・慶応義塾大学客員研究員）



総長時代の世耕弘一―近畿大学提供